

目次

寄稿: アメリカ留学から企業での就職	1-2 (美藤 成)	連載: アメリカ大学院生の給与交渉	4-5 (古賀 朱門)
寄稿: 社会科学分野で地方大学からアメリカへの学位留学を目指す	3-4 (鈴木 健介)	寄稿: いばらの道の見つけ方	5-7 (勝又 麗香)

寄稿: アメリカ留学から企業での就職

Texas Instruments
美藤 成

留学のきっかけ

私は岡山大学時代の交換留学と大学院留学の2度留学を経験している。最初の留学を目指して勉強を始めたのは大学2年になった時のことだ。大学1年の私はなんとなく授業に出席し、学部の友達に誘われたサークルに入って、アルバイトに精を出す、そんないたって普通の大学生だったと思う。当時から10年近く経ってしまっ、はっきりとその頃の気持ちを思い出すのは難しいが、そのまま普通に大学を卒業して、日本の会社で働くという将来がひどくつまらなく感じ、大学生のうちに何か一つでも大きな挑戦をしたいという漠然とした思いを抱いたことだけは確かだ。

留学を志したはいいいものの、何をどうすればいいのかもわからない。そこで相談に行ったキャリアセンターで紹介されたのが海外の大学との交換留学制度だ。大学公認の制度であるにも関わらず、地方の国立大学、まして理系の学部から交換留学に行くことは当時非常に稀なことだった。大学3年になってようやく留学の許可が降りるまでは、前例がないからと留学を認めない学務・教授陣と一向にスコアの上がってくれないTOEFLとの格闘の日々だった。言語学習支援室の先生方や一緒に留学を目指して勉強した友人達には随分とお世話になった。

苦勞してつかみ取ったイリノイ大学アーバナ・シャンペーン校への交換留学でも、ここでは書ききれないほどたくさんの経験と学びがあった。その中で後の大学院留学につながる大きな経験がIndividual Studyという研究の授業だ。これが、当時大学3年生であった私が日本での大学生活を含めて初めて”勉強”ではなく”研究”に触れる機会であった。担当教授の指導のもと、自分の決めたテーマについて論文を調べ、仮説を立て、実験・検証を行う。物事を理解し、仮説の正しさを証明するプロセスに魅力を感じた。たった3ヶ月間ではあったが、自分なりの結論をまとめたレポートにAの評価をもらったことは純粋に嬉しく、これが後に研究者を目指すきっかけとなった。

大学院留学とインターンシップ

大学4年になり進路を決める時期が近づいた。日本とアメリカ両方の研究室で時間を過ごしてみ、研究者としてスキル・経済的に自立するにはアメリカに留学することが最良の選択に思えた。何より、アメリカでもう一度リベンジしたいと思った。当然、周りに同様の進路を選択するような人などおらず、それからはまたネットや本で調べた情報を頼りにTOEFL、GRE、エッセーなど大学院のアプリケーション、奨学金の申請、卒業研究と格闘する日々が続いた。2012年冬、無事にイリノイ大学を含む予定していた全ての大学院へ出願を終え、2013年春には卒業論文を仕上げながら合格通着が届くのを待った。しかし、来ない。待てど暮らせど合格の通知が届かないのである。やれることは全部やった。それでもやはり無謀な挑戦だったのではないか。そんな愚痴をふと当時の担当教授にこぼした。「卒業旅行だと思って教授に会いに行っちゃえば?」最初は荒唐無稽なアイデアに思えたが、すぐに出願先の中でも特に興味のある研究室の教授に研究室を見学できないかメールを送りまくり、3週間後にはアメリカ行きの飛行機に乗っていた。結果、訪問した研究室からの推薦をもらうことができ、いくつかの大学から合格をいただいた。今考えると無茶苦茶ではあるが、教授からのアドバイスを実際に行動に移したからこそ得られた、人生を大きく変える数週間だったと思う。やはり実際自分の目で研究室を見学し、研究室のメンバーと話して雰囲気を知るためにも、出願の際に、できるのであればぜひ研究室訪問することをおすすめする。

合格をもらったいくつかの大学のうち、研究室訪問で一番魅力を感じたジョージア工科大学への進学を決め、2013年8月いよいよアメリカ南部アトランタへ飛んだ。4年間の大学院留学の全てをここで書くわけにもいかないので、特に印象に残っているエピソードを二つ紹介したいと思う。

一つ目は最初の筆頭著者ジャーナル論文に繋がる研究テーマに取り組んでいた時のことだ。大学院2年目に入り、学会論文提出に向けて本格的に研究を進める時期になっていた。Thanksgivingが近づいてもテーマがまとまらず、次第に焦りが募る中でモバイル通信機器近傍からのエネルギーハーベスティング¹というトピックがあった。先行研究を探してもどうしても見つからず、自分ではくだらないアイデアなのではないかと不安に思いながら、締め切りの前日まで実験に追われながらどうにか論文にまとめ、学会に提出した。年が明け、"interesting new perspective"のコメントとともに採用の結果がメールで送られてきた時には、嬉しさで思わず共著者達にメールしてしまった。大学時代を含め、変わっているねと言われることが多々あった。そんな"人と違う"ということの価値が初めて認められた気がした。

もう一つの大きなターニングポイントは企業でのインターンシップだ。大学院も3年目を迎え、クリスマス休暇をヨーロッパ出身の研究室メンバーの実家で過ごさせてもらって、アメリカへ戻った時のことだ。アトランタ着の飛行機を降りてスマホの電源を入れたところ、教授からのものを含む、十数件の着信履歴があり、何事かと思っメールを開くと、研究室の卒業生が働くTexas Instrumentsという会社でインターンシップの募集があるので、その日のうちにCVを提出して欲しいとのことだった。詳しい事情もわからないまま空港でCVを更新して送った結果、1週間もしない間にインターンシップをすることに決まっていた。Texas Instrumentsという会社はアメリカの半導体メーカーとしては珍しく、本社のあるアメリカ南部テキサス州ダラスを中心に国内に半導体の製造拠点を残し、前行程(ウェーハ製造)から後行程(アセンブリ・パッケージング)まで全ての製造過程²を自社でまかなうことができる。その製造過程に私の研究でも使われていた技術を応用する方法を研究・開発するプロジェクトに参加した。たった3ヶ月のインターンシップではあったが、アカデミア以外でも自分の学んだことが活かせる方法があると考えきっかけになった。



Fig 1. Ph.D.のCommencementでHoardingを終えてアドバイザーのManosと同じ研究室のJohnとの記念撮影。

まだ、たった1年強の社会人生活ではあるが、アメリカでPh.D.として働くことについて感じたことをあげて拙文を終えることにしたい。まず月並みかもしれないが、アメリカ大企業の多様性についてである。大学・大学院でも当然いろいろな国、バックグラウンドを持った人たちと関わりがあったわけではあるが、企業では老若男女、専門、経験、人種、住む場所までとにかくありとあらゆる人たちが、利益をあげ、価値ある製品を作るという目的のために有機的に関わり合って組織を形成している。当然非効率に見えることや、コミュニケーションがうまくいかないことも多々あるのだが、この多様性が生み出す柔軟性がアメリカ企業の強みなのではないかと感じる。

次に、会社での成功についてである。Ph.D.課程で、ある分野を突き詰める経験をしてきた私からは、会社に入ってから研究成果をあげ、特許をとり、論文を書き、新しい技術を生み出すことを期待され、それが成功につながると考えていた。ところが会社にはいろいろな形の成功がある。マネジメント職・技術職それぞれにリーダーがあり、様々なトピックの中で自分なりの成功の形を見つけないといけない。研究者としての道を目指すのか、別のキャリアを進むのか、まだもう少し自分の進む道を模索する時間が続くことになりそうだ。



Fig 2. Texas Instruments 在籍中に世界初の集積回路に関する研究でノーベル賞を受賞したJack Kilbyを記念して当時の彼のオフィスを再現したミュージアム。現在所属するKilby Labsも彼の名前からつけられている。

最後に

学生の頃を思い返しても、特別に数学・科学が得意だったわけではなく、最初からこんなキャリアを進むと計画を立てて進んできたわけでもない。多くの方々に支えられ、興味を持ったこと面白そうだと思ったことを続けてきた結果、今に至っている。海外で学ぶ・働くことに少しでも興味を持っているのなら、ぜひ挑戦してみたいと思う。きっと今までにはなかった多くの出会いがあるはずだ。



美藤 成
Texas Instruments Kilby Labs/SC Packaging
Ph.D. Georgia Institute of Technology,
School of Electronical and Computer Engineering

1. 無線通信など放射された電磁波を再度、センサー等の電源として利用するというもので、センサーネットワークやIoTを実現させるために重要となるとされている。
2. <http://www.seaj.or.jp/semi/data/process01.pdf>参照

寄稿: 社会科学分野で地方大学からアメリカへの学位留学を目指す

私は現在ペンシルベニア州立大学(Penn State)経済学部博士課程プログラム2年次に在籍しています。日本では、学部と大学院(博士後期課程2年目まで)を名古屋大学で過ごしました。私の知る限り経済学分野に関しては、米国の博士課程に在籍する日本からの留学生は首都圏・関西圏の主要大学出身者が多くを占め、その他の地方大学から受験するケースはごく稀であるようです。本稿では、地方大学から学位留学を目指すという視点で、私の体験談を紹介したいと思います。

留学を目指した契機

私の研究関心は、国際経済学、わけでも貿易の自由化をはじめとする経済のグローバル化が企業や産業に与える効果について関心を持っています。学部時代にドイツへ交換留学したのをきっかけに、本研究分野に興味を持ち大学院に進学しました。この時点では、米国を含む海外の大学院への進学については具体的に考えていませんでした。博士課程に進級した1年目の夏に、大学の研修の一環で米国を訪問する機会を得ました。その際、修士論文の主要参考文献の著者を訪問できないかと考え、メールで連絡を取ってみたいところ面会を快諾していただきました。Yale大学とUCLAにそれぞれ数日間滞在し、知的好奇心を大いに刺激されるコメントをいただきました。その時はじめて「ここで勉強してみたい」と強く思い留学を具体的に考えるようになりました。

訪問先の先生方からの後押しもあり、その年の冬に一回目の出願を試みますが合格は出ず、翌年、2回目の挑戦でPenn Stateからオファーをいただきました。留学の開始は2017年8月、名古屋大学では博士課程3年目の中盤という時期でした。

学部卒業段階において、将来的に海外の大学院進学を選択肢に入れているのであれば、修了生輩出の実績がある国内のトップ大学に進学することが望ましいのかもしれませんが、しかしながら、私のように大学院進学後に留学を目指す場合もあるでしょうし、現に地方大学に在籍していながら海外留学を考えている読者の方もいらっしゃるかもしれません。そのような方々も、ぜひ夢を諦めずに挑戦してほしいというのが本稿の趣旨です。ただし私の体験談は必ずしも成功例というわけではないので、一事例として参考にさせていただければ幸いです。

地方大学からの受験 - GPAの意味と推薦書・志願書

地方大学から留学を目指すといっても、出願のプロセス自体は何ら変わりません。必要となるテストスコアの基準、揃えなければならない書類等については、本ニュースレターのバックナンバーが参考になろうかと思えます。経済学の場合、審査は専ら書類によって行われます。専攻分野における学修成果については学部・大学院の成績が主要な指標となろうかと思えます。しかし、例えば東京大学の成績表と、留学生を送り出した実績がない大学の成績表では、同じGPAであったとしても、その数字が出しうるシグナルが

異なることは想像に難くありません。海外留学を念頭に置き、国内の主要大学(院)に進学するという選択は、体系立ったコースワークを受けられるというカリキュラム上の利点に加え、情報量に富んだ成績を提示できるという観点でも重要な意味を持つように思います。

ただし現在の在学期間を以てし、受験に際してまずできることといえば、推薦書と志願書を充実させることになります。推薦書について、私の場合は日本の指導教員に加え、幸運なことにもYaleとUCLAの先生にお願いすることができました。指導教員とは日常的にコミュニケーションを取れる関係にありましたが、後者2名の先生とも出願までに複数回面会し、これまでの研究と今後の研究計画等について話を詰めました。結果的にどちらの大学からも合格は出ませんでした。Penn Stateに留学する機会を得ることができたのは、受験校の選択に関するアドバイス等も含め、お二人のサポートあってこそのことでした。身も知らぬ学生の面会希望に応じ、推薦書まで書いてくださったのは例外的だったのかもしれませんが、タイミングや相性が合えば、熱意に応じてくださる先生もいらっしゃいます。ぜひ積極的にコンタクトを試みることをおすすめします。

志願書については、専攻分野のみならず他分野の先生にも内容のチェックをお願いしました。また所属学会の地方部会で、志願書の内容を念頭に置きつつ、これまでの研究内容と今後の計画について話をし、他分野の先生からコメントをいただく機会を得たことも非常に有用だったと思います。英文校閲については社会科学分野にバックグラウンドを持つ英語話者の先生にお願いしました。限られた環境の中でも、大学内外のネットワークをフルに活用されることをおすすめします。

情報収集の難しさ

地方大学から受験するに当たってのもう一つの障壁は、体験談を聞ける先生や先輩といった「縦の繋がり」がないという情報収集の難しさにあります。例えば、外部奨学金への応募は多くの方がされていることだと思いますが、私はPenn Stateからファンドなしのオファーが出るまで奨学金探しすらしていませんでした。結果的に民間奨学財団から生活費相当の支援をいただくことは決まったものの、授業料については自弁となりました。家族からの支援が得られない中、1年目については何とか自弁の目処が立ちましたが、2年目以降、大学から授業料免除がなければ、その時点で就学を断念しなければならないという崖っぷちの状況下で留学に臨むことになりました。

その他にも家探しの仕方や、コースワークを受けるに当たっての準備に関して等、直接話を聞ける留学中の先輩が身近にいるかどうか、あるいは留学先の先輩と繋がるつてがあるかどうかというのは非常に重要かと思えます。米国の多くの大学ではウェブページに大学院生の一覧を掲載しています。どうしても話を聞けるつてが見つからない時には、そうしたところから連絡を試みることも選

択肢かもしれません。地方大学から留学を目指すという時点で入ってくる情報が少なくなってしまうのが現実です。これは私自身の反省でもあります。積極的にネットワークを広げていくことは、留学の可能性を広げる意味でも、また安定した留學生活を送る基盤を作るためにも重要であるように思います。

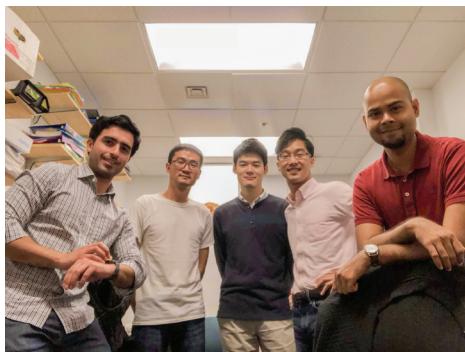


Fig 1. 共にコースワークを生き抜いた同期達と(筆者は右から2番目)。

1年目を終えて

何とか留学のスタート台に立てたものの、1年目の厳しいコースワークを受ける中で、「自分には場違いなところに来てしまったのではないか」と思うことが何度もありました。何とか進級試験をクリアした今も、同級生や先輩を見ては自分の不甲斐なさに落ち込む日々は続きます。それでも、日本にいた時には想像もできなかった

「世界の広がり」を感じる時、国際貿易研究のフロンティアを間近に見つつ、第一線で活躍される先生方の指導を受けながら自身の興味関心を追求できる時、そして、コースワークを共に戦った仲間たちと(真面目なことから雑談まで)議論に花を咲かせる時、留学して良かったと心から思い、同時に、明日もまた頑張ろうという活力が湧いてきます。

地方大学から米国の大学院に学位留学を目指すということは、出願から留学後に至るまで、人一倍の苦勞を伴うことかもしれません。しかしながら、「留学したい」という思いに駆り立てさせる夢に出会えたのであれば、ぜひ諦めないでください。私が留学を目指した時から今日まで、ずっと心に留めている言葉をもって、本稿を締めくりたいと思います。「信念を持って大胆に行動せよ。」みなさんの挑戦を心から応援したいと思います。



鈴木 健介
Ph.D. Student
The Pennsylvania State University
Department of Economics

連載: アメリカ大学院生の給与交渉

カリフォルニア大学サンディエゴ校
古賀 朱門

「アメリカの大学院生は学費免除で給料をもらえる」

そんな謳い文句を、この米国大学院学生会の記事を読んでいる方々は聞いたことがあるかもしれない。アメリカ大学院ではRA (Research Assistant)として雇われれば、約\$40000/年という学費に加え、約\$2000/月ほどの給料を支給してもらえる。学生という身分でありながら、親元を離れ経済的に自立した生活ができるのは、魅力的な話だ。それとは裏腹に、アメリカの大学院に留学している日本人学生の中には、この美味しすぎる謳い文句に疑問を持つ人も少なくないように見られる。研究室の資金繰りに悩まされ、雇ってくれるところが見つからず、大学を去らねばならないというケースもあるからだ。

そんな中、僕はこんな話をしようと思う。RAの給料を如何にして増やしてもらうかについて、僕個人のエピソードと、そこから得られた知見(という名の単なる個人的感想)を交えた話だ。たとえ良い研究結果を出しても、教授が自ずと給料を上げてくれるというケースは、僕は未だ聞いたことがない。(結婚してパートナーとの生活を始めたりすると教授からあげてくれるというケースはいくつか聞いたことがある。)即ち、何かしらの交渉が必要になってくる。この給与交渉に関して、大事なものは以下の三つだと僕は思う。

- (1) 実績を出す
- (2) 研究室内のお金の出回りを知る
- (3) 他のオプションを持つ

(1)、(2)が大事なものは想像に容易いと思う。実績がまだなかったり、研究室が資金繰りに悩まされている状況だったら、教授としても給料を上げてまで雇うほどのインセンティブはないだろう。これらに加え、僕は特に(3)の大事さについて述べていきたい。申し遅れました、カリフォルニア大学サンディエゴ校(以下UCSD)の博士課程五年目の古賀朱門と申します。

下積み時代

UCSDでの博士一年目は最も大変だった。UC系の大学では博士一年目は基本的に大学からのフェローシップをもらえる。そしてこのフェローシップは人によって種類が異なる。僕の研究室では、他の学生はみんな三年間支給されるフェローシップを持っていたのに対し、僕だけは一年間のみのものであった。確かに、研究実績ゼロ、TOEFL 79点、GPAもパツとしないで出願したある種ポテンシャル採用であろう自分にそんな良い待遇は期待していなかったが、他のラボメンバーが皆高待遇のフェローシップとは思わなかった。そしてラボの教授には「君は二年目からうちでRAをするなら、今のうちから研究結果を出しておく方が安全だぞ(ニコリ)。」と精神的ボディーブローを喰らい、一年目は授業もがつつりある中で研究も成果を出せるよう取り組んだ。幸い最初に取り組んだ研究テーマが良かったのか、一年目の後半には学会論文を投稿できる結果が出た。また二年目からのRAでもらえる研究費があることも判明し、胸をなでおろした。

最初の給与交渉～インターンの提案～

少しづつ研究結果も増えてきた三年目の中頃、資金繰りに悩まされていた。研究室ではなく、僕の銀行口座のだ。いくらRAの給料がもらえるといえ、カリフォルニアは物価・生活費が高いので、決して贅沢ができる額ではない。それにも関わらずこのころは時間を見つけては旅行に行ったりしていたので、僕個人の資金が底をつき、月末の残高が一桁ドルになったりしたこともあった。毎月一日に入る給料を大事にしながら、どうにかもう少しもらえないかと考えていた。

最も手っ取り早いのが、インターンシップだ。前回の記事に記載したが、僕は四年目初めの秋学期と終わりの夏学期にNASA/JPLとMERL¹でインターンをした。実は三年目終わり夏にこれらのインターンをできるようにと考えていたが、この頃の僕には一つ気がかりがあった。自分の研究に関して、教授が新しく獲得した研究費があり、その結果を出来るだけ早く出さなければならなかった。インターンをすればこの研究が遅れ、教授は快く思わないだろう。それでも、インターンを考えていることを思い切って提案してみた。すると教授から、「今は研究費の出たプロジェクトをやって欲しい。その共同研究者がいるニューヨーク州のレンセラー工科大(RPI)に夏の一ヶ月半訪問研究に行き、残りの一ヶ月半はUCSDにおいて、このプロジェクトをやってくれないか?」という提案をされた。僕はそこで、「では可能なら、夏の三ヶ月間、給料を上げていただけますか?」と提案した。(ざっくり書いたが、当時はかなり丁寧な言い方をした。)その結果、\$4500/月の給料をUCSDの教授からもらい、家賃やレンタカーなどの生活費をRPIからカバーしてもらうという話で落ち着いた。プロジェクトの研究も続けながら、待遇も良くしてもらうという、自分でも納得のいく結果になった。ここで交渉できたのは、これまでの研究実績がある(1)に基づく考えと、新しく降りた研究費があるという(2)に基づく認識と、そしてインターンを示唆するという(3)の話があったからだと思う。

二度目の給与交渉～就職の提案～

JPLでのインターンから帰ったのち、僕のRAとしての給料は基本給の\$2100/月に戻った。一度甘い汁を吸うと、その味が忘れられないのだろう。僕はまたもや給料を上げられないか考えた。ちょうどその頃、ラボの教授から新しい仕事の提案をされた。しかし、その時点で僕の研究結果は幾分か出ていて、これらを全て論文にすれば例年卒業している学生よりもある程度多くの論文数になるのは目に見えていた。もちろん論文数は研究者としての価値の絶対量ではないので、それだけでは測れないが、それでも僕はす

1. Mitsubishi Electric Research Laboratories

に卒業に値する成果である自信が多少なりともあった。そこで、「四年目以内に卒業して、就職するつもりです。そしたら今の給料よりもだいぶ良いので。」と言ったことを伝えた。それでも教授は「この新しい仕事は君の将来のキャリアにも役立つ」と言った。とてもありがたいお言葉だと思ったが、もう少し具体的な報酬が欲しかった僕は、ラボの卒業生のおおよその新卒月収を提示し、その新しい仕事をして5年目に突入する代わりに、再度給料を上げてくれるようお願いした。結果、\$5500/月まで上げてもらった。企業に就職する人の平均に比べればそれでも少々少ないが、博士学生としてはかなり良い待遇かと思う。

最後に

今回の記事は連載の1回目にする予定だった。しかし、書きおわって読み返すと意見の強い記事に感じ取り、また自分のケースが特殊かもなとも思い、本記事を一度取りやめ、インターンなどの学外活動話をした。それでも、連載という形で結果的に二稿目に出したのは、アメリカ大学院で給与交渉の話をするケースがあまり無いので、自分の具体的なエピソードと数字を出すことにより、良い情報になるかもしれないと思ったからである。3年目前後の自分がこの情報を知ったらもっと早く行動していたかもしれない。そんな思いで本記事の記載に至った。アメリカの大学院生のRA制度は、良くもわるくも"雇用"である。クビになる可能性もあれば、待遇を良くしてもらえる可能性もある。僕はそのことを実感した。

*** 編集部注 ***

TA/RAの報酬の制度は大学および専攻によって大きく異なる。月額上限額を大学あるいは学部が定めていることもあれば、夏休み中は無給で他にアルバイトを探すことが必要となるケースもある。古賀さんの寄稿は給与交渉の成功例として非常に貴重であるが、このような交渉が常に可能でないことは留意して頂きたい。



古賀 朱門
University of California, San Diego,
Mechanical and Aerospace Engineering

マサチューセッツ大学アマースト校
勝又 麗香

寄稿: いばらの道のみつけ方

アメリカなら早く独立できる!という発見

なぜわざわざ日本の博士課程を中退して、アメリカでPh.Dをとったのか?大好きなバンドがアメリカツアーをやって現地のお客さんを汗だくにしていたのがカッコ良かったから、付き合い

いた彼氏に振られてやけっぱちになったから、など軽い動機はたくさんある。しかし、一つだけ理由を挙げろと言われれば、できるだけ研究キャリアの早い段階で研究室を主宰したかったからだ。東京ヤクルトスワローズとTHE BLUE HEARTS、そしてドラゴンボール大好き人間である私は、(1)Underdog¹たれ、(2)いばら

の道を見つけ出し靴を脱ぎ捨てる²、(3)ワクワクする次の強え奴は誰だ³、というのがモットー。そんな私が修士1年の2009年に東工大工学系国際交流基金のご支援のもと、Minnesota大学Twin Cities校にて夏季研究留学する機会を頂いた。そこでアメリカではAssistant Professorでも研究室を持てるという事実を知ることになる。当時の研究テーマは企業では重要だが、アカデミアで取り組んでいる人が少なく、私は議論に飢えていた。片言の英語ながら、式とグラフで先生・学生とサイエンスを語れたことに純粋に興奮した。そう、新しいいばらの道を見つけたのだ！そして、アメリカでポジションを得るためには学位もアメリカで取得する方がチャンスが広がることにも気づいた。

読者の皆さんの中にはまだ留学を迷っている方も沢山おられると思う。こう書くと私は初志貫徹・猪突猛進だったように聞こえるかもしれない。しかし、腹をくくる前には、日本国内で博士を取得し、その間1年アメリカに留学する選択肢などに心が揺らいだこともあった。最終的には、メンターや友人が「なんで？」という包丁で私の動機というリンゴの皮をむいていってくれた。この間に「皆が知っているアメリカの有名大学院出たらカッコいいから」とか「日本の大きな企業に就職してみたい気がする」といった反underdogな理由はあれよあれよという間に論破され、“人材と材料で世界に貢献したい”、という芯が残った。芯は別に人に誇れるようなことでなくても良い(実際、私の芯にはここに書けないような理由もある)が、芯があったことで、大学院ポスドク生活をかなり踏ん張れたと思う。同級生たちが就職し、順調に人生のスタンプリヤーを続けている中、血走って虚ろな目をしていてであろう私のリンゴの皮むきを手伝ってくださった皆様には一生頭が上がらない。本当に、本当にありがとうございました。

なぜ独立できたのか？

2012年に大学院留学のため渡米した私は、2018年9月、University of Massachusetts AmherstのPolymer Science and Engineering学科にてAssistant Professorとして独立した。志望度が高い学科から通常より1年以上早く青田刈りされ、今のポジションを得たのだ。あれ？目標達成？随分順調すぎないか？(そんなこと言うだけで恥ずかしい。ドラゴンボールの平和な回のつまらないこと!) なぜか？分析の結果、以下の3点が認められたものと思う:

- (1) 自分の“匂い”がする論文を書けた
- (2) 人間(特に学生)が大好き
- (3) マイノリティであること

以下では各ポイントにおいて、どうやってその強みが作られたのかを大学院・ポスドク時代を含めて振り返りたい。そして振り返って懐かしがるのはまだ時期尚早、これから迫り来る希望に満ちたいばらの道を紹介することを以って結びとする。

1:自分の“匂い”がする論文を書けた

現在のポジションのオファーを受けたあと、faculty search committeeの一人に論文リストが華々しいわけではない私をな

ぜ採用したのか聞いた。そこで返ってきたのが上記の答えだ。たぶんこれがない人はそもそもPh.D.の資格が問われることになる根本的事項なので簡単に述べる。多くの教員は、Ph.D.の学生は卒業するときには取り組むプロジェクトの重要性を指導教官に教える立場になっているべきだと言うだろう。反対の例は、指導教官の書いたTo-Doリストをこなして卒業する学生という名のロボットだ。私は指導教官に恵まれ、最初はお膳立てされたプロジェクトで始まったものの、自分でプロジェクトを進めていく自由度を与えられた。3年生の頃だろうか、自分の仮説の検証結果が気になって目ざめ、朝4時に電子顕微鏡のある建物に自転車を走らせた誰もいないキャンパスまでの道は私は忘れることができない。

2:人間(特に学生)が大好き

私は専門分野である高分子と同じくらい、人間が好きだ。高分子は分子量すら分布がある、構造の緩さに面白さがあると思っているのだが、そこは人間も共通である。だからこそ、大学院1年目、大変だったことは沢山あるけれど、中でも一番精神的に堪えたのは飲み会で気の利いたジョークで周りを笑わせられないもどかしさだった。バーの中はうるさくて聞くのもままならず、なぜ皆が笑っているのかわからない、そんな状況で人を笑わせるのは無理だ。当時のテキサス州オースティンは日本人大学院生が大変少なく、精神的逃げ場はなかった。とにかくもっと皆と仲良くなりワハハと場を湧かせてみたかった。仲良くなるためには共通の苦勞→成功体験が必要!ということで得意な球技(フラッグフットボール・ドッジボール・ソフトボール)を片っ端からやり、最後はチームを新しく作るまでになり、仲間からの信頼と、内輪なら笑いをとれるネタを得た。そして学会でも純粋に面白い研究をしている人に、地位や所属に限らず話しかけていた。今思えば学生の特権だ。アメリカでアカデミアに行きたいということも、オープンに話し、指導教官以外にも将来のキャリアに対する相談相手、そしてサポーターが増えていき、現在の所属先にもつながった。言ってしまうとネットワークキングだが、当時は正直そこまで深く考えていなかったし、今思うとそれが良かったのかもしれない。



Fig 1. 自ら始め、キャプテンと監督を務めた個性あふれる大学院学科のソフトボールチーム。筆者は前列中央。未経験者が多く初年度は最下位だったが、参入2年目に見事プレーオフにて準優勝した。まるでこの2シーズンのヤクルトのように！研究室を越え、一生ものの仲間ができた。

研究は企業でもできるが、私は不完全で成長の余地のある学生と研究がしたい。答えのない問題に取り組む中での、学生の突然変異があまりにも感動的だからだ。大学院時代、優秀だがとてもシャイで発表がうまく出来ない学部生がいた。一緒に目標を設定

1. 勝てる見込みが少ないとみなされている個人や集団。負け犬ではない。 2. 「英雄にあこがれて」の歌詞より 3. ドラゴンボール主人公孫悟空の口癖

し、練習・反省を繰り返し、いざ本番。その学部生の発表は院生も真っ青の素晴らしいものだった。発表のあと彼女は、照れ臭そうに青いチョコの包みをひとつ手に、ありがとう、と言ってくれた。自分の想像を学生が通り越して成長したのを目撃してしまい、この仕事はやめられないのだろう、と思った。一般に大学教員の面接では学生と話す機会も多く設けられており、私の学生に対する溢れ出る興味・愛情はプラスに働いたと思う。

3:マイノリティである

この点については長らくモヤモヤしていた。私はアメリカにおいて、日本出身であることと女性である点でマイノリティであると思う。前者は自分で選んで留学したので「数少ない日本人留学生」というラベルは自分で選び、実際前例の少ないところから苦労してやってきたご褒美程度、と気にしていなかった。一方で後者、「女性」は自分で選んだわけではない。何かにつけ非学術的に目立ったり、優遇されたりするのがどうも腑に落ちなかった。しかし、ポストク時にアドバイザー(女性)の「気にするな、圧倒的に成功すれば皆黙る」という格言を得て、高3で物理を選択し、ほぼ男子大に入学したときからあった霧が晴れたように思う。世界中でダイバーシティに関する議論や問題は尽きないが、日本よりアメリカの方がマイノリティの扱いに慣れている、というのが体感である。ポストクアドバイザーが私の肩を押してくれたように、私も次世代の様々なバックグラウンドを持つ学生を応援していきたい。

また新しいいばらの道、ワクワクしている

新任教員として勤め始め3ヶ月、ドラゴンボールの新篇章のように見事にまたザコキャラに舞い戻った!プロポーザルが自分の予想した時間の3倍かかってしまい睡眠時間が削られになり2年ぶりに風邪をひいたり、装置の値段交渉があまりにも下手でうっかり100万円損しそうになったり、新しいラボなので優秀な学生をとるのに苦心したり・・・しかもおそらく今学期は全てが一桁二桁さらに

大変になる。もちろん不安になるときもあるが、今は新たな自分の修行ポイントが見えてワクワクしている。そもそも私はナノ材料の表面界面という悪魔が住んでいる領域に興味を持っている人間だ。やはりいばらの道が好きなのだろう。



Fig 2. 記念すべきKatsumata Group 初の集合写真。筆者は左端。これからグループがどう成長してくか楽しみだ。

これを読んでいる材料系(特にソフトマテリアル)のみなさん、もしこの文章が少しでも響くようであればご縁があるかもしれません。私たちは世界中から情熱を共有できる仲間を募集しています。スタートアップのような、活気に満ちたラボです。研究室の創世記は一回きり、逃す手はありません。ぜひ気軽に連絡を下さい。最後に、留学中にご支援いただいた竹中育英会、そして私に関わってくださった全ての皆さんに心から御礼申し上げます。



勝又 麗香
Assistant Professor
University of Massachusetts Amherst
Polymer Science and Engineering Department

米国大学院学生会 <http://gakuiryugaku.net/>

【ニュースレター編集部】

高野 陽平 辻井 快 佐藤 拓磨

松島 和洋 塚本 翔大 本岡 志麻 大谷 将史

newsletter@gakuiryugaku.net

執筆者を募集中!

編集部では、ニュースレターかけはしに掲載する記事を執筆してくれる方を募集しています。ご興味のある方は、上記のメールアドレスにご連絡下さい。

編集後記

米国大学院学生会の Facebook ページができました。 <http://www.facebook.com/gakuiryugaku> こちらのページから「LIKE」「いいね」をクリックして頂くと Wall に書き込みできるようになります!

アメリカに来て、私の話を一番真剣に聞いてくれたのは、田舎の学区に住んでいるスペイン語が母語の子どもたちだった。同じマイノリティとして私の経験に共感してくれた様だ。文系のPh.D.留学生の経験は貴重との事で、教育者の観点から編集部に貢献できればと思う。(大谷)

あまりの寒さに大学から休校宣言が出ました(-30℃@シカゴ)。留学での貴重な経験?しかし、敢えて外に出て寒さを体感し凍った池の上を歩いてみたい。(塚本)
新メンバーを迎えての2019年最初のニュースレターです。今年もニュースレター

の発信方法も含め、新しい事を色々模索していく年になればと考えております。研究の方もアウトリーチ活動を含めてコミュニケーションに力を入れていければと思います。本年もよろしくお願い致します。(高野) - 2019年も執筆者を募集中です!(ニュースレター班一同)